

(五) 八家地藏やかじぞう

地藏信仰

的形町福泊ふくどまりの海岸に、高さ一・八メートルもある石の八家地藏

があります。この地藏は、右手みぎてに錫杖しやくじょうという杖つえを持ち、左手ひだりてに宝珠ほうじゆという玉たまを持って座すわっています。衣えの線せんは、木彫風もくちようふうで、細こかいところまで精巧せいこうにできてい



八 家 地 蔵

ます。その様子からみて、鎌倉時代に造られたものと思われれます。

平安時代の終わりから、源氏げんじと平氏へいしの戦いが次々とくり返され、各地で寺や神社が焼かれていったため、人々の心の不安は強まりました。

鎌倉時代になると、源みなもとのよりとも頼朝しゆごが守護や地頭をおいて、全国を支配しようとし

ました。それで今まで貴族や寺社が治めていたところへ、武士が入りこんできたので、両者の争いがはげしくなりました。

「泣く子と地頭には勝てぬ。」といわれたように地頭は、年貢を厳しく取り立てました。このよ
うな不安や苦しみの多い時代に、

無学な人でも、修行をしなくても救われるということ、地蔵への信仰が盛んになりました。やさしい顔の八家地蔵も、これらの人々の心を救ったことでしょう。

福泊にあるのに、八家地蔵といわれている訳について、次のような伝説があります。

この地蔵は、もともと、八家から福泊へ通じる道のそばにあっただけども、鎌倉時代の終わりごろに、安東平右衛門が福泊港を直すときに、ここに移されました。それで、八家というもとの地名がつけてあるということです。

石塔

別所町の仏心寺に、五輪塔というものがあります。五輪塔は、宇宙

が五つの要素からできているという考えから造られたもので、基礎になつている四角の石が地を表し、その上の石は、順に、水、火、風、空を表しています。このような五輪塔が造られるようになったのは、平安時代の終わりごろですが、



仏心寺の五輪塔

仏心寺の五輪塔は、鎌倉時代に造られたといわれています。高さは、百六十センチメートルあって、形がたいへん整っていて美しく、県の文化財に指定されています。

また、同じ別所町の真禪寺しんぜんじには、鎌倉時代に造られた石仏せきぶつが

あります。たて百八センチメートル、横九十センチメートルの家型石棺せつかんの蓋石ふたいしの裏側うらがわに仏像ぶつぞうが刻きざんであります。頭部は、たいへんはつきりしていて美しいのですが手やひざあたりは、長い年月の間に風化してはつきりしていません。

鎌倉時代の石仏は、そのほか、豊富町とよとみの福林寺ふくりんじにもあり、市の文化財に指定されています。

このような五輪塔や石仏は、そのころ、仏教を信じた人々によって造られたもので、素朴そぼくな中にも、信者たちの安らぎを求めた気持ちが強こほくく感じられます。



真禅寺の石仏

石で造られたものには、これらのほかに、供養くようのために造られた宝篋ほうきやう印塔いんとうや、板状いたびの石に文字を刻んだ板碑いたびや、笠塔婆かさとうばなどがあります。広峯神社の宝篋印塔は、室町時代の作品で、高さ二百二十四センチメートルあります。宝珠の一部はあとで



六角にある笠塔婆
(市指定の文化財)



広峯神社の宝篋印塔

補おぎなったものですが、その他はよくそろいすぐれているので、国の重要文化財に指定されています。

これらの石造遺物は、姫路を中心にした播磨地方に特に多く見られます。それは、この地方が早くから文化が開けていたことと、宝殿ほうでん(高砂寺)の竜山石たうやまいしのような質のよい石がたくさん産出されたことなどによるものでしょう。